

## 周辺からの記憶 41

# 2021年度 多賀城・宮古

村本邦子（立命館大学）

3ヶ月、沖縄に滞在中である。点々と移動しながら、本島各地、数々の離島を巡っている。機会に恵まれればお話を聞かせて頂くこともあるが、基本的にはひたすら歩き回るフィールドワークである。本やインターネットから情報を得て、現地を歩き、情報と照らし合わせながらアップデートする。まったく情報のない発見があると興奮する。道に迷って道を聞いたり、現地の人と立ち話したりすることもある。人から「なぜインタビューしないの？」と聞かれることがあるが、その土地のことをまったく知らずしてインタビューするなんて傲慢なことではできないと思っている自分がある。可能であれば、滞在中の前半、自分の身体で自分なりに土地を感じ、理解し、後半部分で何人かにあらためてお話を伺えたら幸いだと思っているが、ご縁という要因も大事である。そして、こういった感覚は東北のプロジェクトを通じて醸成してきたものだと気づく。

心理学者は人に興味があるから、もっぱら誰かの話を聞くことに関心が注がれる。でも、人々のことを理解するためには、人々の暮らす世界を時間的にも空間的にも少し引いて見る必要がある。それには、木や岩や風のを聴くのはひとつの良い方法だと思う。たとえば、沖縄本島南部八重瀬町にある「富盛の石堀大獅子」は、ジリグスクと呼ばれるグスクの中にあり、火除けとして尚貞王 21（1689）年に設置されたもので、八重瀬岳に向かっている。1945年6月、日本軍は富盛の八重瀬岳付近に陣地を構え、周辺は激しい地上戦の最前線となった。米軍がこの大獅子を弾除けとして使用している写真が残っており、大獅子の体にはたくさんの弾痕がある。

3世紀以上にわたって人間の世界を見つめてきたこの大獅子は何を見て何を感じてきたのだろうか。大獅子に触れながら対話してみる。そんなことが重要である気がしている。もちろん、何も知らなければ声を聞くこともできないわけだし、知識や情報には偏りがあるわけだが、それも含めて「ものの声」を聴ける身体をどう作れるのかはテーマである。



## 2021年度 多賀城プロジェクト

### 9月30日(木) 蔵王でお祝い

以前より最終年にはお祝いをしようと言っていたので、1日早く出発し、レンタカーを借りて、上山真知子さん、平田さなえさんと一緒に蔵王に泊まる。ここは何度か来てお気に入りの場所だ。大露天風呂に入り、軽く散策をして、夜、かなり美味しいすき焼きを頂く。女3人、しゃべったしゃべった。



### 10月1日(金) 支援者交流会

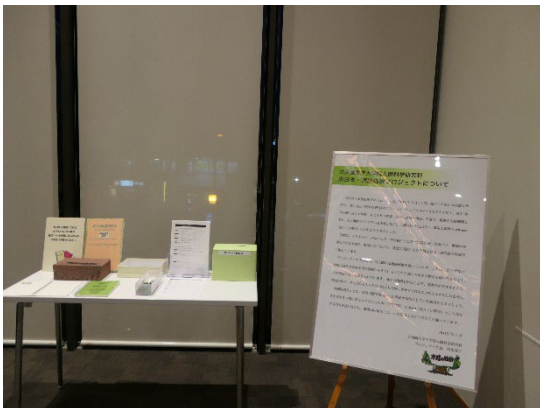
翌朝、仙台に戻り、またまた美味しい寿司屋でランチ。栄養過多である。台風が来ていて、9月末までのコロナ禍の緊急事態宣言と台風接近で、実はギリギリまで心配した。

台風の影響で、予定していた NPO によるタガの柵ツアーは残念ながら中止となったが、TSUTAYA の漫画展を確認して、18時からの支援者交流会を開催した。いつものように食事を分け合っというわけにはいかなかったが、互いの近況や今後の思いや見通しについて語り合った。

多賀城市立図書館の館長や担当者は新しい方へ変わったが、変わらず暖かく迎えて頂き、旧図書館時代から関わってくれている丸山隆さん（現在は教育委員会生涯学習課）が、今年も応援に駆けつけバックアップしてくれた。プロジェクト初年度からプログラムを引き受けてくださっているおおぞら保育園の黒川先生、それから、多賀城民話の会の新しい会長、小林悦子さんも参加してくれた。自己紹介とともに、これまでの振り返り、現地の方々から、プロジェクトは今年で最終回となるとしても、今後も現地の力でできることを続けていきたいとの決意表明があり、報われ励まされる思いがした。

多賀城民話の会の齋藤さんは、ご病気でリハビリ中とのことだった。代わって会長になられた小林悦子さんは71歳、とてもパワフルで、子ども5人を育てながら、教師を続けたそう。『語り継ぐ大津波』の原稿のコピーを頂いた。障がいのある娘さんがいて、そのお陰でたくさんのネットワークができたとのこと。ただ、その娘さんの彼氏が津波で流されたそうで、『語り継ぐ大津波』にも書き記されていた。娘さんも若くしてどんなに大きな悲しみを背負ったことかと胸が痛むが、現在は結婚してお元気にされているとのことだった。





## 10月2日(土) プログラム

朝、会場に集合して、プログラムを実施する。「歌とお話と伝承遊びを楽しもう」のワークショップには、予想以上にたくさんの親子が集まってくれた。人数制限をし、体温測定、手指の消毒をしたうえで、30分程度で入れ替わりながら、30名以上が、一緒に楽しいひと時を過ごした。多賀城民話の会による民話の語り、「いわしのひらき」や「かっぱ」の歌と手遊び、おおぞら保育園の先生方による大型絵本「はらぺこあおむし」やペーパースーツ、お手玉遊びなどのプログラムがあった。人数の関係で、今年は、スタッフは周囲から見守る感じになったが、保育園の先生方や民話の会のみなさんの子どもを惹きつけるプロの力にあらためて感心した。

丸山さんが塩釜の有名なおはぎをたくさん持ってきて下さったので、お昼は小林さん宅にお邪魔して、皆で頂くことにした。午前中のプログラムで、にこやかにビデオ撮影をされていた夫の小林立雄さんは、被爆二世の物理学者で、共産党議員を6期務められたそうだ。被爆の問題についていろいろ聞かせてもらったが、偶然の重なりに驚く。その後、短い時間だったが、民話に出てきた近辺の喜多郎神社や末の松山、沖の石、津波側溝跡など案内して頂いた。

午後は漫画トーク。こちらも参加者は先着とし、うまくテーブルをわたして集中的な空間が作られた。このあたり、TSUTAYAの企画力はいつもさすがだと思う。アンケートを見ると、初めての方、毎年来てくださっている方、雑誌等他のチャンネルを持つコアなファン層など、さまざまな立場の方がいたようだ。「今回が最後だとは残念でたま





りません。いつもマンガで軽いけど深いおはなしをありがとうございます。お元気で！」「思春期の息子を持つ。自分にとってとてもヒントになるお話を聞くことができました。心に栄養を頂いた感覚です。団先生、村本先生 たくさんのご支援ありがとうございました。」など、今回が継続してきたことの最後の区切りであることを意識したコメントが多く寄せられた。



終了後は、最終回ということで花束贈呈までしてもらい驚いた。写真から花束のイメージを作ってくれたとのことで、細やかな心配りがありがたい。嬉しくて、私は、この花束をフィールドワーク中も大切に持ち歩き、自宅に帰って、誇らしく花瓶に生けた。懐かしい人々が駆け付け、口々に感謝の言葉をかけてくれた。あれから11年、本当にありがたいご縁を頂いたものだ。











夜は院生を連れて、毎年お世話になっている上山真知子先生、J.F. モリス先生ご夫妻宅にお邪魔し、被災直後の支援物資が届かない時期、町内会の人たちと具材を持ち寄り毎晩一緒に食べていたという暖かい豚汁を頂きながら、当時の状況や防災意識についてお話を聞いた。日頃からの備えがあれば、被災時、自分が助かるだけでなく、人を助ける余裕もあるという精神はなかなか真似のできないことだと思う。玄関に備えられた防災具一式、仙台タンスの知恵や本棚転倒防止、物を置かないことなど教えてもらい、日常を見直さなければと思った。東北に来るようになって、私も以前より備えをするようになったが、まだまだ不十分であることを認識した。



## 10月3日(日)午前 荒浜小学校

タクシーで荒浜へ向かう。周辺の散策をするが、記念公園には観音や鳥居が残り、名前が刻まれた慰霊碑があった。荒浜小学校は海岸から700mに位置しており、2階まで津波が押し寄せた。学校の周りを取り囲むように建っていた家は全て流されて、現在は津波の衝撃に耐えた松がまばらに残り、植樹されたばかりのまだ小さい松の子どもたちがあった。7.2mの高さの防潮堤が海岸沿いに延び、沿岸付近は仙台市により災害危険区域に指定されたため、住民は集団移転をして、空き地が広がっている。住宅跡地の空き地に仙台市が農園や施設などを誘致しているということだった。

荒浜小学校では、無償でボランティアが案内をしてくれる。地元の先生で、この地に住み、当時、子ども2人が荒浜小学校に通っていたが、職場は少し離れたところにあった。現在は別な所に暮らしている。わかりやすい展示、映像となっていた。荒浜地区では逃げ遅れや避難をしなかった住民ら180名が犠牲となったが、ここでは、児童や教職員、地域住民ら320名が屋上に避難して助かった。もともとは5キロ先に避難することになっていたが、直前に、屋上避難に決めたばかりだったという。荒浜小学校は避難所となっていたので、被災時、地元自治会の人々が集まり、先生方が教室を割り振って、皆、整然と避難したという話だった。

震災前の街の様子や、地区ごとに競う運動会や村祭りなど町の行事の映像が流れ、日頃からの関係と団結力がスムーズな避難につながることを実感する。運動会の映像に登場する人のなかには亡くなられた方も

あり、映像を観れないという地元の人もいるとのことだった。賑やかだったかつての地域と現在の風景が対照的で悲しい。尋ねてみると、遺構や映像展示などは住民にアンケートを取り、全員一致にはならなかったが、話し合いで決めたということだった。難しい問題だと思う。







それからバスで荒井へ向かい、資料館を見て、メディアテークに向かう。良いお天気で、テイクアウトのカキフライ弁当を買って、通りの木下のテーブルで食べる。気持ちが良い、感動のおいしさだった。



### 10月3日(日) みやぎ民話の会との交流会



民話の会の方々との交流会では、予定していた小野さん、加藤さん、島津さん、目黒さんのほか、偶然そこにおられた民話の会の精神を受け継ぐ若手アーティストたち、瀬尾夏美さん、小森はるかさん、福原悠介さんも加わり、十年を振り返り、民話の意味を考える濃密な時間となった。



まずは、小野和子さんが十年を振り返ってお話してくださった。震災の後、民話の会は民話の特色を生かしながら何をしたのか。震災のあった月の終わりに岩沼で例会を持った。「大変だったよね」と口々に労い、「今年予定していた民話の学校は無理だよね」と話した。小野さんだけは「やりましょう」と主張したが、予定されていた語り手も家を流されたり行方知れずになっていて、結局、中止と決まった。小野さんは、最後に、



「みなさん、それでも、小野がやりましょうと言ったことだけは覚えておいてください」と捨て台詞のように言ったという。

予定していた語り手の山元町の庄司アイさんと新地町の小野トメヨさんの消息がわからなかった。家がすっかり流されたことだけはわかっていた。そのうちに無事がわかり、苦労して探して何とか居場所を知ることができた。電話もつながらなかったの、住所がわかってからは手紙を書いた。アイさんからの葉書に、「形あるものはすべて流されたが、気づいたら胸に民話があった。これを命綱にしてこれから生きていきますから、よろしく願います」と書かれていた。トメヨさんは87歳だったが、東京の息子のマンションからしょっちゅう手紙をくれた。小野さんから郵便が届くと、名前を見ただけで、封を開ける前から涙が流れ、それまで一度も泣いていなかったのに、堰を切ったように大泣きしたという。「私には民話があるのだ。生きている限り、私は民話で頑張ろう」と書いてきたと思ったら、その後すぐに帰ってきて、仮設住宅で民話を語り始めた。こんなふうに民話が生きていることを教えてもらった。

そうこうするうちに、「やはり民話の学校を開こう」ということになった。被災地のどまんなかの南三陸に残ったホテルを会場に借りた。あっという間に全国から反応があって、先着200人で受入れを打ち切った。6人の被災した語り手たちを招き、体験されたあの日を語ってもらった。参加者たちは「あの激しい体験をまるで民話を語るように語った。心が激しく揺さぶられた」などと言った。小野さんは、民話とは民の話、生き抜いてきた現実をくみ取っていかなく

ばいけないと、民話の範囲を広く捉えてきたので、こういうことこそ民話であるという思いがあった。ただし、その時には福島の問題に触れられなかった。「必ず次にはみなさんに福島のことを伝えたい」と約束した。

そうするうちに、福島の目黒さんが現れて、3年後に丸森町で民話の学校を開催した時には、福島の問題にも触れることができた。私もその回には参加した。その後、目黒さんは双葉町の人々に体験の聞き書きをしてくれた。テープがあると緊張して話せないからと、ひざを突き合わせ、話を聞き、帰ってから思い出して記録した。44人に聞き書きをして、冊子に残すことができた。山元町の津波の記録もできたし、町がすっかり消えてしまった閑上は、昔の閑上の姿を記録する冊子を作成した。

庄司アイさんともお会いしたかったが、今回、車の免許を返上し、だんだん外に出られなくなったという話だった。島津さんによれば、「生き残った者のつとめである」と、頼まれたら全国どこへでも行って語ったが、調子の良い時と落ち込むときの波が激しく、涙が止まらないという時もあったという。民話活動を通じて見せる姿は「すごいな」と驚くことばかりだが、やはり無理に無理を重ねて頑張っておられたんだなあと思う。私も個人的にお話を聞かせて頂いたことがあるが、民話が本当の話であることを十分に伝えられなかったために逃げ遅れた人々がいたことを大変に悔いておられ、その悔いをもとに強い意志で自身を鞭打って頑張っておられることを知ったのだった。

また、鶴野くんから質問があって、みやぎ民話の会の人たちと林竹二(1906-1985)との関係について語られた。林竹二の最終講

義が『若く美しくなったソクラテス』（田畑書店、1983）という本になった。小野さんの夫である小野四平さんと同じ大学で、家族ぐるみの交流があった。「プラトンは、私の書いたものはひとつもない。もしあるとすれば、すべて若く美しくなったソクラテスです」と言ったそうだが、小野さんは、たしかに民話についてもそう思ってきた。「私の言葉はない。みんな聞いてきたおじいさんおばあさんの言葉を反芻して文字化したもの。もしあるとしたら、それは伝承してきた人の言葉なのだ」と。加藤さんや島津さんも林竹二の教え子であり、学園紛争で授業はほとんどなかったが、映像など通して子どもに教えるということはずいぶん学んだとのことである。子どもとの向き合い方、つまりは人との向き合い方の姿勢と言えるだろう。小野さんの、「聞くということは、命がけで、自分を壊して相手に向かうことであり、自分との闘いだと思っています」との言葉が印象に残った。

また、若い人たちの関与についても質問があり、たまたま今回、一緒に参加してくれたアーティストたちを含む若い人たちとの出会いがあった。濱口竜介さんたちに民話の学校の撮影を依頼し、そこから東北三部作ができた。1500本もあった民話のテープは全部CDにしてくれたし、小野さんに『会いたくて聞きたくて』の本を出すことを進めてくれたのは学芸員の清水ちなつさんだった。みんな30代の人であり、メディアテークという場が作ってくれたものである。話していくと、若い人も興味持ってくれる。メディアテークでやっている民話をテーマにした「ゆうわ座」は人気で、毎年多くの人が集まり、とくに若い人の反応がいい。

瀬尾さんや小森さんも、震災と出会い、媒介になりたい、伝えたいと思い、その方法を手探りしているうちに民話の会と出会い、学んできたという。長い時間をかけ、大きな思いが沁み込んでいく。そこに自分も参加する。いろんな人の気持ちが自分の気持なんだと思う。現実を伝えるためには、物語や、語る人・聞く人の関係が必要になる。伝えたいという思いだけでは足りない。どうすれば自分たちの表現方法で形にできるかを考えるようになったし、大きなヒントももらったのだということだった。





## 2021年度 岩手プロジェクト

### 2021年11月5日(金)岩手フィールドワーク

前夜に岩手入りし、朝、平泉の中尊寺金色堂と毛越寺に立ち寄ってから大船渡へ向かう。今回は最終回ということで、初期にお世話になった方々を訪問するつもりだった。大船渡では、2012年のプログラムでたいへんお世話になった方を訪ねる。何年か前にも一度訪問したが、その後、支援事業が終了して連絡先がわからなくなっていた。でも、小さな町なので、人を通じて、今はラーメン屋で働いていることがわかった。ラーメン屋でラーメンを注文し、その方と立ち話した。ずいぶん風貌も変わっていて、若々しくきびきびと動いていた。以前はもっと慎重にゆっくり動いていたように感じる。責任の思い役割を果たしておられたので、きっと大変だったのだろうと思う。気になっていた子どもさんたちも元気に頑張っていることがわかり、安堵した。

すっかり新しくきれいになった「かもめテラス」で「かもめソフト」を食べ、懐かしの大船渡プラザホテル、今はBRTの駅となった大船渡駅、盛駅、2012年にプログラムをやったカメラアホール、歩道橋から見た盛駅の現在の写真を撮った。街はすっかり新しくなった。嬉しいような寂しいような何だか感傷的な気持ちになった。この寂しさは何なんだろうと考えてみるが、犠牲になった人々とあの時間を過去に置いてけぼりにしているような感覚なのかもしれない。現地の人の気持ちはどんなものなのだろう。

それから、三陸道を走って、浄土ヶ浜に向かった。1時間半。以前はくねくね曲がる海

岸沿いの道路だったが、今はトンネルばかりの不愛想な道だ。便利にはなったが、楽しくはない。夕暮れ前の浄土ヶ浜は、風が強く波が荒かった。雨がパラパラし始めたので、宿に荷物を置いてから車を返し、夜はよしよしでメンバーと合流し、打ち合わせを行った。





## 11月6日(土)午前 宮古でのプログラム

翌朝、昼食を買いにリニューアルされた魚菜市场へ行ってみる。かつてここで漫画展とプログラムをやったことがあり、その時の賑わいを懐かしく思い出した。現在は、スペースがとても小さくなっていて、7時半頃着いたが、まだ届いているものは少なく、餅屋で赤飯と団子を買って、野菜売りのおばさんたちがちょうど広げ始めた松茸おこわとクルミ餅を買った。



宮古での受け入れ窓口となっている社会福祉法人若竹会は、高齢者や障がい者たちと関わる仕事であることから、コロナ禍でのイベント開催はまだ難しいとのことで、プログラムは残念ながら ZOOM での実施となった。10時半から12時、各々、ホテルの部屋で漫画トーク、13時から14時は交流会を開催した。



交流会は院生中心に座談会形式で実施した。それぞれ自己紹介し、院生たちからの質問で話が広がった。震災が起きた時は、施設の利用者が帰りのバスに乗る30分前だった。事務所が街中にあるので、津波はここまでは来ないだろうと思ったが、実際にはそこまで来た。魚菜市场のある所まで逃げたが、下水から水が溢れ出た。



利用者は重症の自閉症だったりするので、パニックになり、腕を噛みつかれたりもしましたし、避難所で暴れたり走り回ったりした。不安でいっぱいだったろうと思う。事業所のことは町の人たちも理解してくれているので、配慮して個室を提供してくれた。今回は地域の人に助けてもらったが、逆に、利用者が自宅にいる時だった時のことを考えると、それぞれの存在を地域に知ってもらい、



普段から気にかけてもらえるようにしておく必要があることを今回痛感した。支援者は女性3人だったが、自分の家族の安否もわからない状態でそこにいなければならなかった。仕事を投げ出してでも家族の所に飛んでいきたい気持ちもあったが、目の前の利用者を放っておけない状態で、職員も辛かった。また、振り返ると、父に身体障がいがあり、薬をたくさん飲んでいて、お薬手帳なども持っておらず、家族も何の薬を飲んでいるのかよく理解しておらず、そのあたりは反省点だということだった。

鶴野くんが、「民話や手遊びが利用者にごまで届いていたか、楽しさを押し付けてはいなかったか気になる。この場で否定的なことを言うのは難しいとは思いますが、今後のためにも率直な意見をもらえたらありがたい」と言ったことに対し、鷺田さんから「生まれつき障がいのある人は、高齢者と違って、結果的に社会的経験が少なくなる。桃太郎の話を知らないということもあつたりするので、いろんな体験を職員と積み重ねることが必要だと思うし、ありがたかった。率直に楽しんでいたと思う」とのことだった。鶴野くんは、以前、オーケストラのグループで、ある施設を訪問した時、「静かな穏やかな曲がいいですね?」と言うと、「そうではなく、むしろにぎやかなのをやってください」と言われ、そうすると、ほとんど意識もなかったような人が反応をしたりして、刺激がない状態の人々にとって、普段経験できない未知のものに遭遇するよさがあるのだと思ったことがあるという。理解するしないより、ふだんできない遭遇体験もいいのかなということだった。

受け入れ窓口としては、最初、何をやった

らいいのかわからなかったが、平田さんに引き出してもらったりしながら、少しずつ自分たちの持っているものを使えるようになった。自分たちを気にかけてくれる人が遠くにもいるんだと嬉しかった。「震災当時は独身で、結婚して子どもが産まれて、たいへんな十年だったな」と十年を振り返るスタッフもおられた。高齢の方も多く、この間、亡くなられた方もある一方、震災後に生まれた子どもたちが増えた。十年の年月を感じる。直接会うことはかなわなかったが、リモートでの漫画展や交流会を通じて暖かいつながりを感じることができた。

終了後、イーストピアみやこの漫画展を見に行き、センター所長の中嶋良彦さん、施設運営事務員の山口正伸さんにご挨拶をした。今年はワクチン接種などの関係で、スペースが限られるなか、工夫して素敵な展示空間を作ってくださっていた。アンケートやノートにはさまざまな声が寄せられ、プロジェクト終了後も漫画展が続いていくといいと思う。





## 11月6日(土)午後 田老のお話を聞く

それから三陸鉄道に乗って、新田老駅へ。新しい田老総合事務所の所長となった齋藤清志さんが駅まで来てくれ、お話を聞かせて頂く。休日にも関わらずの対応だった。齋藤さんの名刺に岩の写真がついていて、「山王岩」というそうだ。だいぶ前には陸続きだったものが切り離されてできた。3.5メートルほどあって、震災で倒れたかと思ったが、そのまま残り、「震災にも負けない岩」と言われている。子どもの頃、磯場でこっそりツブやウニやアワビを採ったような場所で、田老地区の人にとっては馴染み深い大事な場所のひとつになっている。



総合事務所は昨年5月にここに異動してきた。元の事務所は、震災でも残り、自家発電があったので、そこだけ震災中でも灯りを点し、340人の避難者が入り、行政組織もここに凝縮された場所。ただ、建物の耐震基準を満たしておらず、ここに移転してきた。保健センターや商工会議所の田老事務所が入り、3階が三陸鉄道の待合になっている。



震災の時、3mの津波が到達すると報道された。田老では「地震が起こったら、高いところに逃げろ」というのは身につけているが、その情報と防潮堤への過信によって逃げ遅れたと言われている。今回の津波は高さ16メートルで想定外と言われた。シミュレーションによって、今回あらたに決まった高さは14.7メートルで、東日本大震災の津波の高さより低い。防潮堤を2メートル上げるためには莫大な差額費用がかかる。たとえば、10メートルの防潮堤なら底辺が15メートル必要で、14.7メートルだと40メートルを越える。昔は狭い所に急勾配の

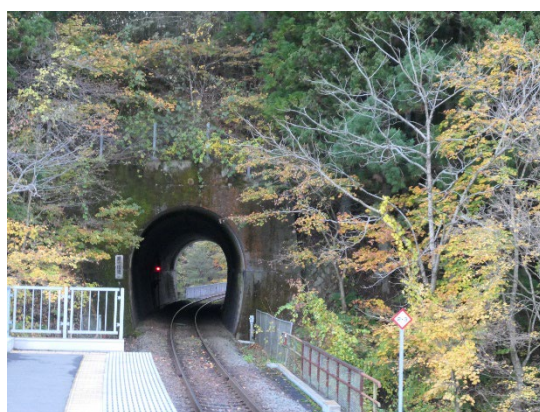




防潮堤を作り、今回はそれが壊れて大きな被害が出た。安定勾配にするためには、底辺の長さが必要で、土地の確保にも費用がかかる。効果と費用のバランスを考慮し、百年に1度の津波に耐えられる防潮堤になる。しかし、今回のように千年に1度の津波には耐えられない。それで、高台に住宅地を作り、道の駅など働く場所は浸水しても人が犠牲にならなければ建物は建て直せばいいという考えをとっている。防潮堤はあくまでも逃げるための時間を稼ぐものである。

三陸沿岸道路ができ、田老地区に立ち寄る人が少なくなったので、「道の駅たろう」を中心にイベントを開催し、地区の活性化を図っている。「道の駅たろう」は民間、国、市が運営している施設で、他の施設とは運営形態が異なる。最近ではステージイベントやマルシェなどが出店される「タロウィン」、ミニコンサート、あわびとり体験、鮭の串焼きなどが出る「鮭・あわびまつり」が開催された。今年は鮭が不漁で、鮭の提供は難しくなっている。今年の水産業には変化があり、春先からおかしい。2月の水温が上がって、バフウウニは全部死んでしまった。鮭やサンマも不漁で、南の魚（イシダイやシイラ）がとれている。地球温暖化が原因と考えられているが、水産業が盛んな三陸では大打撃である。おもしろいものも採れて、3千キロのマグロが採れた。ただ緊急事態宣言で30万円にしかならず、豊洲に流れたいが、みんながっかりしていた。

震災の経験をした方々には忘れようとする人もいるが、「つないでいかなければ」という人たちがいて活動している。他方、被災しなかった人たちは普通の生活に戻り、見えない壁があることを感じる。震災時の避



難所で、避難所には物資がたくさんあり、有名人がいっぱい来て支援を受けられるが、直接的な被害を受けなかった人たちは一切支援を受けられず、壁ができた。また、田老地区の人口減少は歯止めがかからない。平成23年度3月に4,434人だったものが、令和2年3月に2,855人と、1,579人減少した。震災後4、5年、他市へ3世帯同時の転出が増えている。高齢化率は43%（宮古市38%）、川井地区では高齢化率57%で、小学校の生徒は100人程度、3年生は9人のみ、婚姻数も減少している。

人口減少に伴い、子どもの数が減り、新生児は年に1、2人しか生まれない状況である。また、小学校は各学年、1クラスとなり9年間同じクラスで過ごすという状況になっている。小学生にバレーボールを教えている齊藤さんは、バレーを教えていた活発な子が中学校を不登校になったりする状況に心を痛めている。震災後の子どもの減少によるものかなど意見交流がされた。

田沢さつき（2021）『田老の街で生き抜いて～二度の津波を乗り越えたおサヨさんの物語』（宮古民友社）を頂いた。田老の道の駅にある善助屋食堂のおばあさんの話を、田老出身の絵本作家が聞き取りをして、作品にしたものだった。昭和と平成のふたつの津波、戦争、大火など次々と襲う災禍を生き延びた女傑おサヨさんの物語で、明るく逞しく生きる女性の生き方としても、また宮古の歴史や文化を知るうえでも学ぶことが多く、民話のように語り継ぎたい物語だと思った。

また、宮古はコロナが出ると、その日のうちに特定されてしまうので、一人でも出たら、その地域の店にも近寄らない。ワクチン

接種率は8割を越えたという話も出た。

田老総合事務所までは三陸鉄道を利用したが、最近全線が開通し、鉄道を利用する人もあったが、駅からの景色は防潮堤に遮られて海が見えない。宮古に戻り、蛇の目で北三陸丼とカキフライを食べた。いつもながらに安くて豪華である。



## 11月7日(日) 午前 学ぶ防災

朝、ジャンボタクシーで田老の学ぶ防災へ。毎年お世話になってきたガイドの佐々木純子さんと2年ぶりの再会を喜びあった。防潮堤はさらに拡大され、水門は塗り固められて閉ざされていた。防潮堤により田老地区からは海面が見えず、説明をしていた佐々木さんは、海面が見えないことにより津波がせまっていることを感じる機



会を損ねていると話されていた。また、この地区は高台に逃げるための避難道が町全体に作られている。急いで逃げるときにぶつからないように道路の交差点には角がなく、「隅切り」されている。

震災遺構「たろう観光ホテル」には昨年を除き毎年訪れてきたが、ここは建物の2階まで津波が押し寄せたが、建物が柔らかい素材でできていたため、津波で壁などが流され枠組みは残った。しなやかさの典型のようである。とは言え、鉄骨や階段はぐにゃぐにゃになっている。ホテルの最上階で、いつものように、田老の海を見ながら、津波が町を飲み込む映像を見た。何度見ても息をのむ衝撃的な映像である。

その後、高台の新しい居住地を見せてもらった。佐々木さんによれば、災害公営住宅の家賃はどんどん上がり、最初1万円だったのが5~6万になって、出ていく人も多く、現在は空室があるので、一般募集しているそうだ。その話を聞いていた運転手さんが、後でご自身の体験を話してくださった。

運転手さんは岩泉の出身で、クレーン車の運転手として関東で働いていたが、高齢の両親を看るために岩泉に戻り、震災前には宮古の道路工事などやっていた。東日本大震災があり、ご自身の被害はなかったが、防潮堤などその後の復興工事のほぼすべてに関わった。ところが5年前の台風で家が流されてしまった。家族は無事だったものの、地域の施設が流され、10人ほどが犠牲になった。そのうち3人は親戚で、近所の人も家と一緒に流された。この台風では、東日本大震災とは違って保障は少ししかなく、災害住宅も6万円もするということで、結局古い一軒家を買った。今は親が脳梗塞で介

護が必要になり、タクシーに乗っている。自然災害だから仕方がない。大きな工事は資格が必要だし、技術も必要なので、ゼネコンにしかできないから仕方がないと思うとおっしゃっていた。言葉を失った。

それから、道の駅で齋藤さんお勧めの「畠山一伸さんの林檎」を買い、大海嘯記念碑を見て、田老のシンボルである三王岩を見て、遠野へと向かった。









## 11月7日(日)午後 遠野博物館

道の駅「風の丘」で簡単な昼食を買ったが、ひさしぶりに訪れた道の駅は大きくきれいにリニューアルされ、地元の人で賑わっていた。

それから、遠野博物館の前川さおりさんを訪ねた。前川さんには、初年度のプロジェクトで大変お世話になった。その後もお訪ねしたことはあったが、今回、久しぶりで、前川さんの生き生きと楽しそうな様子が嬉しかった。

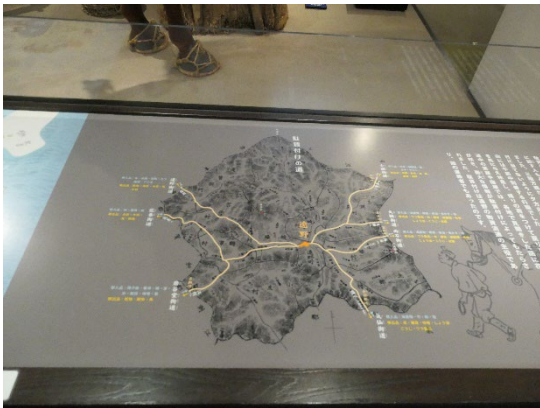
前川さんが遠野博物館を案内して下さった。第1展示室「遠野物語の世界」では、『遠野物語』は、その舞台である遠野の世界、「山」から「里」、そして「町」へ展開していった遠野の歴史を語るものと捉え、物語と歴史の関りを新たに表現している。大画面のマルチスクリーンシアターでは、『遠野物語』や民話を題材にした映像を観ることができ、中心にある地形ジオラマ・スクリーンには遠野の創世神話と多くの不思議な言葉が湧き上がる仕掛けになっていた。第2展示室「遠野 人・風土・文化」では、町、里、山という領域でそれぞれ独自の文化を育み、互いに影響しあいながら、盆地として一体となっている。

遠野は岩手県の内陸部で四方を山に囲まれている。その山々の中でも特に高く美しいのが早池峰(はやちね)と呼ばれる山、東側には二番目に高い六甲牛(ろっこうし)、西側には附馬牛(つぎもうし)と達曽部(たっそべ)という集落の間辺りに石神(いしがみ)と呼ばれる一番低い山がある。「遠野の山と三人の女神の話」によれば、大昔、女神が3人の娘をつれて遠野郷にやってきた。

母女神は、「今夜いちばんいい夢をみた娘にいちばんいい山をあげる」と約束した。上2人の娘は眠りについたが、一番下の娘は寝つけない。そうこうしているうちに、長女の胸に空から美しい花が落ちて来るのを見て、その花を取って自分のものにした。結局、一番下の娘がいちばんよい早池峰山をもらうことになった。今でも、その3つの山にはそれぞれの女神がおさめていて、遠野の女性たちは、女神たちに嫉妬されないよう3つの山には入らないという。

末娘が姉の花を盗んだというのに良い山をもらったことに釈然としないが、前川さんによれば、プロメテウスの火のように、神話や民話で「盗む」ことは決して悪いことではなく、知恵の表れなのだという。また、世界の物語には末子思想があり、末子が幸せになる話が繰り返し語られてきた。かつて富を相続するのは一番長生きする末子にするという考えがあったのではないとも言われているようだ。

また、前川さんによれば、遠野物語は遠野の話だけでなく、三陸海岸の物語が25%含まれており、三陸の海の物語なのだそう。遠野は昔から沿岸部をつなぐ中継地として、馬によってさまざまな物資が運ばれた。天狗に頼めば、沿岸部に2時間で行って帰って来れた。その天狗は花巻を中心に活動していた修行者だったということで、尾根伝いに行く道を知っていたと考えられる。そんな遠野では、物と人との流通とともに、情報も伝わって伝承されていく。遠野に情報が集まることに加え、秋から春までの長い冬には人の流れが完全に止まるので、繰り返し語られ、物語として醸成する時間があった。つまり、開く時間と閉じる時間の両



方から成る。城下町であるから、そこに全国展開している妖怪話も集まった。

大正12年の遠野の展示では、さまざまな街道が収斂して物が交換されていく様子がわかるが、これを目の当たりにしたのが2011年だった。ぞくぞくと自衛隊のトラックが遠野に集められ、仕分けして物資を沿岸部に送る。まるで遠野物語だと思った。遠野でも停電や物資の流通が止まったりもしたが、普段から蓄えがあるので、それほど困らなかった。米がたくさんあるので、おにぎりを作って沿岸部に送ってやる作業をやっていた。これは歴史的に何かあればいつもやっていたことである。海岸への山道は火事になったが、遠野の人は道をよく知っている。大槌も焼けたが、最初に様子を見に行った職員に「大丈夫でしたか」と聞いたら、「いや、道路は焼けないからよ」という答えが返ってきた。沿岸部に婚姻関係のある親戚がいることも多い。

第3展示室では、「遠野物語と呪術」の特別展をやっていた。





## 11月7日(日) 大平悦子さんの民話語り

最後は例年通り、大平悦子さんの藁ぶき屋根の古民家を訪ねた。パチパチ燃える囲炉裏を囲み、手作りの暖かい「ひつつみ」や漬物を頂きながら、民話を聞かせてもらった。

最初のお話はカップの求婚の話だった。色気づいた男カップは新鮮なキュウリとキリの花を食べてキューンキューンといい男の屁をして求婚する。女カップは気に入った一番いい屁の男カップを選んで夫婦になる。タロウという男ぶりのいいカップは、サラコという美しいかっぱに惚れていたの、準備万端で誘ったが、サラコは見向きもしないでどこかに行ってしまった。がっかりしたが、サラコに劣らず美しいマツコというカップが来たので求婚し、2人は晴れて夫婦になったというお話。

二番目の話は、遠野物語 42 番にテツという名前が出てくるが、佐々木喜善が『遠野奇伝』に書いた方の話で、そちらはウマノスケという名前、実名だと思ふとのこと。ある年の秋、山に萱を狩りに行った帰り、若者たちが岩穴に狼の巣を見つけた。3 匹の子狼がいて、かわいいので連れて帰ろうと、年寄りの反対も聞かず、連れて帰ってしまった。親狼が気づいて追いかけて来て、家の周りをグルグル回った。子どもは親を呼んでクーンクーンと鳴き、親は切ない怖ろしい声を出して吠えた。餌をやっても食べず、子どもは3 匹とも死んでしまった。感づいた親狼の復讐が始まり、次々に馬を襲った。交代で見回りを始めると狼は来なくなったので、また萱狩りに行くと、待っていたように7 頭の馬が殺された。狼退治をすることにして、山に馬を置き隠れて鉄砲を構えている

と、狼が馬に飛び掛かった。なかなか打つことができず、ウマノスケが飛び出し、腕に上着をぐるぐる巻いて、鎌を持って飛び掛かった。そこにメス狼もでてきて噛みついた。ウマノスケが「俺を撃ってもいいから早く撃て」と言うが、誰も撃てない。ウマノスケの息子が飛び出して、鎌でメスの狼の脇腹を突き刺した。狼は退治できたが、ウマノスケは狼に噛まれた毒で狼のようになって狂い死んだ。心を痛めた若者たちは手厚く葬って石碑を建て、息子の面倒を見た。

三番目の話は、12 月 10 日、大黒様の年取りの日の備えものの話。大黒様が餅を備えてもらった。餅が大好きだったのでたらふく食べて、お腹が痛くなった。困っていたら、母神様から、生の大根を食べて寝るように言われたが、大根がない。大根を探して歩いていくと、川の畔で山と積んだ大根を洗っている女がいた。旦那様は数を数えているからあげられないと断られたが、困っていると、女は大根の山のなかから 1 本に途中から 2 本に分かれている枝大根（まっか大根）を探し出し、片方を折ってくれた。お腹の痛いのはそれで治った。それから、12 月 10 日の大黒様の日には枝大根を備えるのが習わしになったということだ。

四番目の話は、いろいろの種火の話。女たちが代々種火を絶やしてはならないという掟の家があった。新しく来た嫁も、種火を大事にして消さないよう気をつけていた。ところが、その年の大晦日、忙しく働き片付け終わって一息ついたところで、種火が消えてしまったことに気づいた。嫁は青くなり、死んでおびるしかないと思いつめ、外に出た。ビュービュー風が吹き、雪が降るなか、オロオロ歩いて門を出たら、一人のお爺さんが

背中に棺桶を担ぎ、手に線香を持っていた。「線香をもらえないか」と頼むと、線香がないと葬式をあげられないから、死人の入った棺桶ももらってくれと言われた。やむなく、線香と棺桶をもらい、種火をつないだ。棺桶は、嫁入りで持って来た長櫃にすっぽり入れて隠した。最初はよかったが、暖かくなってくると変な臭いがするようになり、夫にばれてしまった。事情を聴いて可哀そうに思った夫が、外に捨てにいこうと持ち上げたら、音がして臭いが消え、大きな金の塊が入っていた。この家は長者になり、火のおかげだとそれを屋号にした。

最後の話は「字のない手紙」。字の読めない夫婦が大喧嘩をし、妻は荷物をまとめ里に帰ってしまった。もともと好き合って結婚したので、どちらもだんだん恋しくなって後悔するようになった。同じ村の人が妻の村の近くまで行くことになったので、「これを届けてくれ」と夫は小袋に小石2つを入れて頼んだ。それを届けたら、妻はコムカ（お米のはしっこ）を入れてその男に託した。受け取った夫は喜んで迎えに行った。丸く収まって良かった良かった。どんどはれ、という話だった。「恋しい恋しい」「迎えに来ないか」というメッセージだった。

短い滞在時間にめいっぱいお話を聞かせて頂いたが、時にユーモラスで、時にシリアスなお話に笑ったり揺さぶられたりと、豊かで贅沢な時間だった。

コロナ禍で現地に行けるか案じていたが、プロジェクトをやってきた遠野、大船渡、宮古に足を運び、これまでお世話になってきた皆さんと会うことができ、最終回として満足できるものとなった。

つづ

